１ドルPRESS

164 号
Sep.
2025 年

本日はご来場いただき誠にありがとうございます。暑い日が続いておりましたが…暦も秋になり、待ちに待った「芸術の秋」到来！この１ドル PRESS は、当館のホールオルガニスト・インターン生とホールスタッフが、より多くの方にオルガンへ興味を持っていただきたいという想いで発信しています。ご覧いただけますと幸いです。



本日の出演者 濵野芳純（はまのかすみ）さんへインタビュー

■本日のコンサートで注目してほしいポイントを教えてください！
今回のプログラムは、オルガンの“ゆれる”音に注目しています。オルガンには、音にビブラートをかける機能があり、パイプに送る風自体を揺らしたり、異なるピッチの音を組み合わせたりと様々です。今日は横浜の潮風のようなオルガンの爽やかな音色も、お楽しみいただければと思います。



■現在のマイブームは何ですか？
マイブームというほどではないですが、休日には友達と温泉、釣り、ハイキングなどによく行きます。基本的にアウトドアのアクティビティが好きです。

■ご来場のお客様へメッセージをお願いします。
横浜の一等地にある素敵なホールで演奏できるのを楽しみにしていました。今日聴いてくださった皆様の一日が素敵なものになるよう、祈りをこめて演奏します。



― インターンシップ21期 尾崎麻衣子の『ドイツ オルガン紀行』Vol. 2 ―

今回は、フランクフルト空港から電車で約1時間半のドイツ中西部のライン川沿いの街、キートリッヒのオルガンをご紹介します。聖ヴァレンティン教会（Die Pfarrkirche St. Valentin und Dionysius zu Kiedrich im Rheingau）にあるこのオルガンは、1500 年頃のゴシック様式のものとされ、非常に古い歴史を持ちます。その歴史と共に改修が繰り返され、現在は、ゴシック様式に修復された 1860 年当時の状態に再現されています。パイプ表面には中央から開閉できる両開きの扉がついており、その扉の内側には緑を基調とした絵画が描かれ、オルガン全体としても、緑と金色の装飾の美しさに目を奪われます。ペダル鍵盤は1オクターヴと少ししかない小型のオルガンながらも、手鍵盤は2段あり、ストップも意外と豊富です。鍵盤を押す感触が心地よく、とても音色が澄んでいるのが印象的でした。 細く繊細で芯のあるはっきりした発音ですが、心地よく耳に入る柔らかさも併せ持ったパイプの響きが非常に美しかったです。
キートリッヒ近郊のリューデスハイムはワインの産地として有名で、この地域はユネスコ世界遺産に登録されており、ライン川を見下ろしながら葡萄畑を散歩することができます。またライン川沿いは、鉄道、船、ロープウェイ、自転車など、様々なスタイルで四季折々の美しい景色を楽しめます。ぜひオルガン見学と共に周辺の魅力的な街並みにも足を運んでみてはいかがでしょうか！



カラーのオルガン写真とストップ表もぜひご覧ください▸



イラスト・文：新田朝香

～ インターンシップ 21 期 新田朝香の《オルガン知っトク情報》～

今回は『ピアノとオルガンの違い』について 3 つのテーマから掘り下げていきます

1 つ目は「音の仕組みの違い」についてです。

ピアノはハンマーで弦を叩いて音を出す打弦楽器で、音が減衰するものの、強弱や音色変化を自由に付けられるため、ダイレクトな感情表現をすることができます。

一方、オルガンは空気を送ってパイプ（管）を鳴らす楽器で、タッチによって強弱や音色変化はつけられませんが、持続する音の響きが魅力です。ロマン派以降の作品では、シャッターペダルを使って強弱を表現する方法もあります。

2 つ目は「文化・歴史の違い」です。

ピアノは 18 世紀以降、家庭に普及し「市民の楽器」として人々の暮らしに寄り添いました。一方オルガンは中世のころから教会に設置され、キリスト教と深い結びつきをもつ楽器として発展しました。ヨーロッパでは宗教儀式や地域文化の中心にオルガンが置かれ、多彩な作曲家がその表現を追求しました。

日本ではキリスト教文化がそれほど根付かず、明治以降に教育用や西洋音楽の導入を通して広まるという独自の歩みをたどりました。1980～90年代にかけ日本全国のコンサートホールにもオルガンが設置され、宗教的側面だけではなく、コンサートで多くの人がオルガンに触れることができることも特徴です。

最後に、「作曲家が描いた美学の違い」について、3 人の作曲家を例に挙げて考察していきます。

19 世紀フランスの作曲家・オルガニスト、セザール・フランクはフランスで初めての交響的なオルガン曲を残し、ロマン派で多く用いられた「循環形式」をオルガンに取り入れた作曲家ですが、ピアノ曲では低音部の多用や、フーガ形式などといったオルガン的要素が見られます。ロマン派を出発点として、現代オルガン音楽を切り拓いたオリヴィエ・メシアンは、鳥の鳴き声の模倣をあらゆるジャンルで表現していますが、特にオルガン曲では基音ストップのみならず倍音管ストップのみを多用して、東南アジアに由来するリズムに乗せて高音域を鳴らす方法で再現しました。

同じフランス人作曲家であり、今年生誕 150 年を迎えたモーリス・ラヴェルは、数々のピアノの名曲を残しましたが、実はオルガン曲を書いていません。その真の理由は分かっていませんが、彼のオーケストラの代表作《ボレロ》の中では、途中メロディー（ホルン）とチェレスタの基音の上に 5 度上（ト長調）および 3 度上（ホ長調）をピッコロが演奏する手法が施されています。これはまさにオルガン的な発想をオーケストラに用いた好例で、彼が倍音管の音色の組み合わせを熟知していたことがうかがえます。

ピアノとオルガンは「同じ鍵盤楽器」という枠を超えて、それぞれが人類の音楽史に独自の役割を果たしてきました。ぜひ 2 つの楽器の違いを当ホールの演奏会で聴き、違いを知り、「聴く楽しみ」を一層広げていただければ幸いです！

♫♪♫♪♫♪